

できることからやりたいことへ ...
そして社会の中で きっと私にしかできないこと

働く女の会 代表 君島 圭

組織の中でうまく生きていくには、あんがいいろんな「技術」が必要なんじゃないだろうか。

自分が言いたいことをコントロールする技術だったり、まわりから聞こえてくる余分なことを聞き流す技術とか、そのうえで海千山千の人の中でうまく自分の環境を快適に作り上げていく技術なんかも...

組織で働くっていうことは、仕事以外にもこんなに膨大なエネルギーが必要なのだ。

それでも私は正社員でいたときも、派遣やアルバイトでいたときも、どこに入ってもうまくやっていたし、要領よくこなしてしまっていた。そんな自分に不自然さを覚えつつ。

大学を卒業して入った会社では、私は総務人事に配属され、研修が終わると同時に忙殺される日々を過ごしていた。
新人とはいえ、無謀なまでに大きな仕事を任される。でも私にとってはうれしいこと。やりがいも充実感も感じていた。

一方で、私の中ではその頃から漠然とした違和感が生まれはじめていた。
「これは他の人でもできる仕事。私にしかできない仕事ってなんだろうか」
日に日にこの思いは強くなっていった。
私は「誰でもできる仕事」に甘んじている自分への苛立ちを抑えられず、2年を待たずに組織を飛び出した。

就業中に参加したマナー講師の先生は、魅力的な女性だった。
五十代とは思えない美しさ、女優経験もあるという華やかさ、
そして私たちの些細な悩みや日々の話を、楽しそうにゆっくりじっくり聞いてくれる姿勢に私は何かを見つけた気がした。

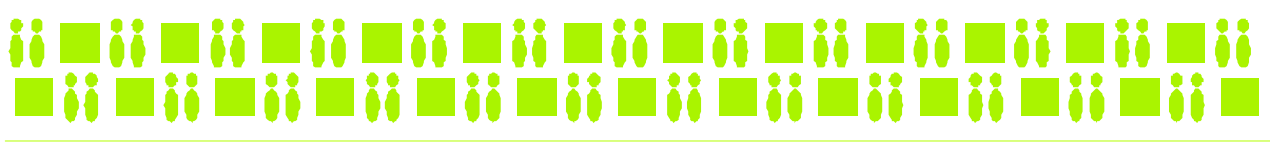
会社を辞めてすぐ、この先生の事務所を訪れた。アポイントが必要などということさえ分かっていなかった。
偶然時間があいて事務所に行った先生に、私は「ここで働かせてください」とお願いした。

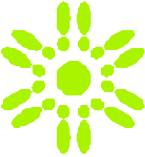

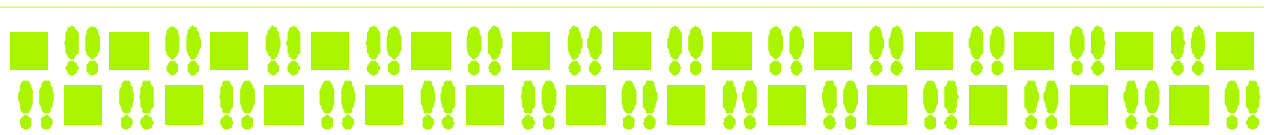
先生は少しだけ困ったような顔をしたが、社会のことを何も知らない私のことを怒ったりすることもなく、経営者としての視点でゆっくり話をしてくれた。

「あなたがここで働くってことはね、それだけ会社の売上げを増やさなくちゃいけないのよ。
あなた自分で営業取ってこれる？」


どこかの会社に入ればそれだけで十分にお給料がもらえる、という感覚でいた社会人2年生の私に、
「社長」であった先生は、「仕事」の本当の意味を私に突きつける。

私の中で優しかった先生のイメージはどこかに行ってしまった。
私はしょんぼりしてあてもなくなった未来に失望し、華々しい理想と現実の厳しさを受け入れるまでずいぶん時間がかかった。





しかし現実には待ってはくれない。私は生活のために次なる仕事を探した。



時代は Windows が発売される前のこと。

私は正社員として雑誌の版下製作会社に入り 2 年で Mac の技術を習得した。そして派遣登録をして OA オペレータとして各企業を渡り歩いた。当時の派遣は専門職のみだったので、正社員の倍以上の収入が得られたからだ。

「他の人にはない技術を私は持っている」ちょっぴり優越感のようなものを感じていた。

Windows 導入期には、私の仕事は引っ張りだこになり、現実には私の技術が必要とされているという満足感があった。

IT 技術の変化とともに私の仕事もタイピストからインストラクター・ヘルプデスク、ネットワーク構築や HP デザインへと変化した。しかし時代は派遣法の改正により、仕事の単価がどんどん落ちていった...

それでもそこそこの収入を得て、「私にできる仕事」は食い扶持としては十分であった。

ただ「何かが違う」というずっとくすぶっている思いを打ち消すほどではなかった。

それは、本当に自分が望んでいる仕事、つまり「私が本当にやりたいこと」ではなかったし、朝から晩まで PC に向かい続ける体力勝負のこの仕事を、私は一生続けられるとは思っていなかった。

当時私は仕事の傍ら、湧き上がる思いを文字に叩きつけていた。

私は IT 系で生活を支えつつ、怒りにも似たぶつけようのない想いや、後から後から出てくる言葉を綴り、自分のあり方、生き方を考え続けた。

何ができるのか、何がしたいのか。

社会の中に、自分の居場所を模索し続けた。

だけど、どこをどんなに探したって正解は見つからないのだ。

あるとすれば、きっと私の胸の中... 探すのではなく、自分が変わるしかない。

とてもつらく、孤独な作業だった。

迷いが生じるたび、私は優しく先生に幾度も手紙を書いた。泣きながら今の迷いを綴り、ときには強がったり虚勢をはったりもした。

先生は、私の混乱を載せた手紙をいつも同じ温度で受け止めてくれていた。そして数日後、美しい文字で何枚にも綴られたお手紙が届くのだ。私はこの手紙を心待ちにし、今でも宝物のようにとってある。




表現者である私は、次に FM ネットワークという勉強会を主宰し、機関誌を発行し書き綴った。また知人が作る異業種交流会の会報や地元の Pub で発行するかわら版、新聞の読者欄への投稿など、可能性があるところにはすべて文章を送り続け書き続けた。


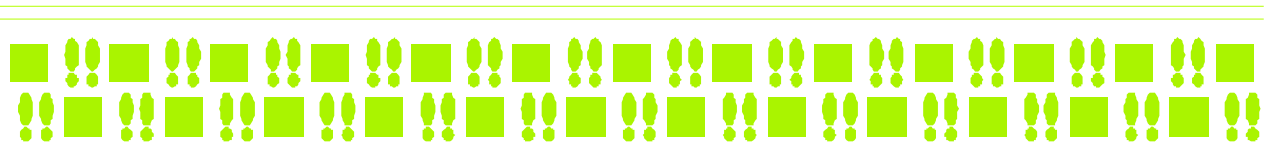
数年後、ようやく商業誌の紙面に短い連載のお仕事をいただいた。

書店に並んだ誌面を開き、自分の名前と文章を見つけたとき、はじめて私の中の「何かが違う」が胸の中から消えていった。

... これだったんだ。私がずっと求めていたのは。

それは「できること」「やりたいこと」と「私にしかできないこと」が一致した瞬間だった。

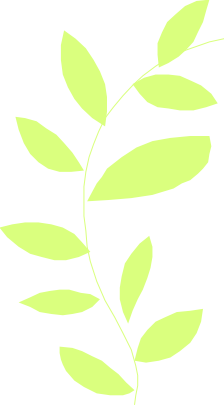




私が組織を飛び出し先生の事務所の門を叩いてから15年。

私は今、表現者としての新たなかたちとして、働いている女性たちの拠りどころとなるべく「働く女の会」を続けている。

この会はFMネットワークの頃のようなフェミニズム思想ではなく、制度や組織への批判でもなく、「今」「私」たちが生きること、仲間としてその本音を語り合い、シェアしあうことで解決を目指す場所として、また社会の中の保健室として存在する。



先生から送られたあたたかい手紙をいつも傍らにおいて、私は多くの女性の迷いや痛みと接している。

その働く女の会の第一回目のイベント写真を見たとき、私は全身に電気が走ったような気がした。初めて出席した先生の講座で撮った15年前の集合写真とダブって見えたからだ。

当時真ん中に座っていたのは、美しい先生。
今、真ん中にいるのは、まぎれもない私である。

私はその写真を見て、改めてひと知れず決意する。
「先生の後を継ごう」

先生と同じことはできないかもしれないけれど、私なりに、私の方法で、私にできることを...

「できること」
「やりたいこと」
「私にしかできないこと」

それでも自分の中に迷いがなくなるまで、決断してから一年もかかった。

ずっと私を支えていたのは「何かが違う」というこの小さな違和感。
これは「どこかに正解がある」「私がやるべき仕事（ミッション）がある」ということを意味する。

私なりの答えを見つけ出すためには
妥協せず迷い続けること
納得いくまで探し続けること しかない。

私は答えが出るまで存分に迷っていいと思う。
迷えるという今の自分の感性を信じてほしいと思う。

「誰か」の基準で良し悪しが決まるはずがない。なぜなら、「誰の」人生でもない、「私」の人生だから。たった一度しかない自分の人生だから、時間がかかっても、結果がたとえ今生の世で出なくても、探し続けていく方がいい。

「先生と一緒に仕事をさせてください。私、いっぱい営業取ってきますから」
今なら自信を持って言えるのに。

「よくここまでがんばったわね」
今頃先生はあの美しい笑顔で、天国から微笑んでくれていると思う。

了

